View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

否定の接頭語「無・不・未・非」の用法

著者	野村 雅昭
雑誌名	ことばの研究
巻	4
ページ	31-50
発行年	1973-12
シリーズ	国立国語研究所論集 ; 4
URL	http://doi.org/10.15084/00001760

否定の接頭語「無・不・未・非」の用法

野　村　雅　昭

1.　否定の接頭語とは何をさすか

現代漢語の中で，使用頻度がもっとも高いのは，いわゆる二字漢語であるが，それについでよく用いられるのが一字漢語である。この一字漢語は，単独で使用されるよりも，他の語（特に二字漢語）と結合して用いられることが多い。他の語と結合する場合に，その多くは，「委員会・飛行機・小学校長・試験放送中」のように，後部分として結合し，前部分として結合するものは，種類が少なく，使用量も多くない*1。

この前部分にくる一字漢語は，後部分にくる語に対して，修飾被修飾の関係を持つ点で共通性がみられるが，おおよそ，次のような種類に分けられる。

○連体詞的修飾関係：同教授・現委員長・各競技団体

○形容詞・形容動詞的修飾関係：悪条件・急斜面・美少女

○名詞的修飾関係：核実験・性教育・美意識

そして，前部分にくる一字漢語の中には，上にあげた用法とやや性質を異にするものがある。たとえば，否定・打ち消しの意味を持った，次のような一群の語である。

無関係・無気力；不公平・不規則；未完成・未経験；非公式・非合法

これらは，次のような点で，特徴を持っている。

(1)　造語要素の意味的な結合関係が，他の前部分にくる一字漢語とちがって，一般の構文上の修飾関係の順序と異なる。

無関係・不公平：名女優・食中毒

（cf　殺人・着陸・過保護・被圧迫階級）

(2)　和語に同様の用法を持つ言語単位が発達してない。

（cf　音無しの構え・上着無しで外出する・親知らず・向う見ず・ノーカーデー）

(3)　いわゆる形容動詞の語幹を形成する*2。

無意味な・不景気な・非常識な

（cf　大規模な・有意義な／一般的な／合理化する）

もちろん，このような特徴が，これらの否定の意味を持った一字漢語だけにみられるものでなく，なにがしかの注釈を加えなければならないことは，（　）内に示した例からも察せられよう。しかし，ここでは，これ以上深入りすることはさけたい。ただし，(3)については，多少ことばを加える必要がある。

まず，形容動詞の語幹を形成するということには，なんらかの前提条件が必要であろう。文法論上たえず論議をよんでいる，形容動詞という概念を無条件にあてはめることが妥当か否かを検討しなければならない。また，これらの否定の意味を表わす一字漢語は，しばしば接頭語とも称せられるが，もしそうとすれば，これまで，接頭語は，語調を整えたり意味を添えたりするだけで，接尾語のように文法的機能を与えるはたらきを持たないとされてきたことに抵触する。

これらを接頭語とみるには，多少の留保を要する。まず，これらは，二字漢語の構成要素としても，「無期限：無限　不愉快：不快　未完成：未完　非人情：非情」のように用いられ，自立しえない単位と結合する場合でも，意味的には，ほとんどかわりがないようにみえる。また，「皆無・無になる・前非・非を鳴らす」のように，後部分にも用いられたり，語基あるいは自立語とみてもよい用法もあったりする。しかし，一方，「無届け・不確か・未払い」のように，和語とも自由に結合できること，また，後に述べるように，二字漢語の場合とは異なる機能を持つものがあることなどの点で，接辞とみてよい用法もある。この点についても，ここでは，これ以上は述べず，一応，接頭語ということで，論を進めることにする。

すなわち，本論で考察の対象にするのは，一回以上の結合をした語（大部分は二字漢語だが，二回以上の結合をした語や，和語や外来語の言語単位も少数含まれる）と結合する，否定の意味を持った一字漢語である。二字漢語の造語

成分としての用法は，直接の問題としない。また，現代語における用法に限定し，その成立の問題にもふれないことにする*3。

これらの否定の接頭語は，和語に同様の言語単位がないこともあって，造語力が強く，かつ，それを部分要素に含んだ結合形は，しばしば使用される。しかし，これらの接頭語の用法や機能には，まだ十分な説明が与えられていない。たとえば，「かれは，こどもに対してまったく無理解だ」と「かれのこどもに対する無理解にはこまったものだ」の「無理解」は，品詞論的にはどう説明するか，また，「非公式」という言い方があるのに「不公式」という言い方がないのに対して，「非合理な制度を改める」の「非合理」を「不合理」に置きかえても，それほど不自然ではないのはなぜか，等々。こうした問題を解決するために，本論では，次の二つのテーマを設定する。

(i) 否定の接頭語は，他の語と結合して，形容動詞の語幹を作るか。

(ii) それぞれの否定の接頭語には，どのような用法・機能のちがいがあるか。

そして，このテーマについて論ずるために，次の二つの方向から分析をする。

(i) 否定の接頭語と結合する語は，どのような性格を持っているか。

(ii) 否定の接頭語を部分要素に含む語は，文中でどのように用いられるか。

*1 筆者の調査では，三字漢語の場合では，前部分にくるものと後部分にくるものとの比は，異なり語数で約1：3.6，約：延べ語数で，約1：4.8である。(「三字漢語の構造」国語研究所報告『電子計算機による国語研究VI』に所収予定)

*2 このことを指摘しているものに，次のようなものがある。
斎賀秀夫「語構成の特質」(『講座現代国語学II』所収)
中野洋「形容動詞語尾・助動詞・助詞の連接形態」(国研報告42『電子計算機による新聞の語彙調査III』所収)

*3 二字漢語に否定の接頭語がつく用法は，中世からみられるが，広く一般的に用いられるのは，私見によれば，翻訳語の影響もあって，明治中期からと考えられる。その成立を論ずるには，二字漢語の場合の用法も分析すべきだが，問題を現代語の用法に限ったので，あえてそれにはふれない。

2. データの性格

本論で資料とするのは，当研究所で行なわれた，二つの語彙調査のデータか

ら採集した，これら否定の接頭語を含む用語例である。二つの語彙調査とは，以下に記すものである。

○現代雑誌九十種の用語調査（『国研報告21・22・25』所収）

○電子計算機による新聞の語彙調査（『国研報告48』所収）

前者は，昭和31年に発行された九十種類の雑誌から，延べ語数で約44万語を，後者は，昭和41年に発行された三種類の新聞から，約300万語を標本として抽出したものである。ただし，ここで直接採集の対象としたのは，前者については，昭和43年度から45年度にかけて行なわれた，特別研究「漢字機能度の研究」で作成した，漢字母を見出しとした一覧表，後者については，同調査と併行して行なわれている漢字および表記の研究で作成した，漢字表記語台帳である。

それぞれから，無・不・未・非が接頭語的に用いられた例を抜き出して一覧表にまとめたものが表1である。ただし，これには，次のようなものは，除いてある。

○現代語としては，造語成分に分解することがむずかしいもの。三字漢語で言えば，○＋○○のように分解できないもの：不世出・不思議・不可解・不可思議・未曾有

○広告欄・表などで，文脈を伴わずに用いられたもの：無担保・無指定・無額面・無所属。

○映画の題名やレコードの曲名に用いられたもの：未成年・未完成

○和語の最小単位と一次結合をしたもの：無届け・不向き・未払い

○不または無で表記され「ブ」と読まれるもの：不器用・不作法・無沙汰

3. 否定の接頭語と結合する語の長さ

表1からうかがわれることの第一は，結合の対象となる語の長さが，無・不・未と非では，明らかなちがいを示すことである。正確に言えば，非を除く3グループでは，大部分が二字漢語（最小単位の一次結合）であるのに対し，非では，二次以上の結合形が半数以上を占めている。

二字漢語が，前部分に否定の接頭語，後部分に形式的意味を添える接尾語を

表 1　新聞・雑誌の調査に出現した否定の接頭辞を含む語

無 71/276	～安打°$_5$・～意義△・～意識$_{17}$・～意図°・～意味$_{12}$・～格付°$_6$・～過失°$_2$ ～関係$_{23}$・～関心$_{16}$・～期限°$_7$・～軌道$_7$・～記名°$_2$・～休日°・～給水°・～競争°$_4$ ～協定°・～許可°$_2$・～気力$_4$・計画°$_2$・～効果△・～国籍$_2$・～災害°・～差別°$_5$ ～自覚°・～四球°$_3$・～試験$_7$・～事故°$_8$・～思想°・～失点°$_4$・～慈悲△ ～資本△・～修正△・～収入°・～修理°・～重力°・～趣味△・～条件$_{18}$ ～所属°$_4$・～処罰△・～思慮°・～制限$_5$・～政策△・～政府°$_2$・～責任$_{20}$・ ～節操°・造作$_5$・～走者°・～秩序$_5$・～抽選°$_2$・～定型°・～定見°・抵抗$_4$ ～統制°・～投票°$_2$・～得点°$_4$・～頓着°$_3$・～任所°・～能力°$_2$・～配当△ ～発根△・～発情△・～伴奏°・～反動°・～反応°$_2$・～批判°・～表情$_6$ ～分別△・～防備△・～免許°$_{15}$・～理解$_4$・～利子°$_2$
不 91/411	～安定$_{15}$・～案内△$_2$・～一致$_7$・～衛生△・～得手$_2$・～介入°$_2$・～確定°$_3$・～活化°$_2$ ～活性△・～活発°・～可能$_{46}$・～干渉°・～完全$_4$・～機嫌$_4$・～起訴$_9$・～規則$_3$ ～行蹟△・～均衡$_4$・～謹慎°・～均等△・～景気$_6$・～経済△$_6$・～携帯△$_2$ ～見識°$_2$・～健全°・～合格$_6$・～公正°・～拘束△・～公平$_8$・～合理$_{11}$・～心得$_2$ ～再議△$_2$・～採用°$_4$・～作付°・～参加°$_{11}$・～賛成△$_2$・～支持°・～支給△ ～自然$_6$・～始末$_9$・～自由$_{41}$・～十分$_{30}$・～需要°$_4$・～消化$_2$・～承認° ～条理$_3$・～親切$_8$・～信任$_{14}$・～正確°・～成功△・～正常°$_2$・～成立°$_2$ ～鮮明°・～存在△・～相応△$_2$・～退去°・～注意$_4$・懲戒°$_2$・～都合$_6$・～釣合$_2$ ～調和△$_2$・～定期$_5$・～的確°・～適格°・～適合°・～適当°$_3$・～手際$_3$ ～徹底°・～道徳△・～得意°$_3$・～徳義°・～得策°・～特定°$_2$・～似合$_2$ ～人気$_3$・～熱心△・～必要$_{13}$・～平等$_3$・～勉強°・～補充°$_2$・～本意°$_2$ ～身持△・～明確$_5$・～名誉$_5$・～明朗$_4$・～愉快$_7$・～用意$_5$・～溶解°・～利益$_2$ ～履行△$_3$・～連続°$_2$
未 25/63	～解決$_7$・～確認°$_3$・～完成$_5$・～経験$_5$・～現像°・～合意°・～公開$_5$・～公認°$_3$ ～償還°$_2$・～承認°・～処置°・～処理°・～審議°・～成年$_4$・～成立°$_2$ ～組織°$_2$・～治癒△・～徴収°・～提出°・～配属°・～発見°$_2$・～発表$_{10}$ ～発達△・～封切り°・～利用°
非 78/201	～衛星化°・～衛生的°・～汚染地区°・～会員°・～科学△・～科学的△ ～核武装国°・～核保有国°$_7$・～課税°$_{15}$・～関税障壁°・～癌性△・～管理職° ～喫煙者°・～共産圏△・～共産国°・～共産主義°・～共産主義国° ～共産陣営°・～共産勢力°・～協力°$_5$・～居住者△・～近代的△ ～クリスマス的△・～軍事化°・～軍事的°・～現業部門°・～現実的°$_3$ ～公開$_8$・～公式°$_{29}$・～公認°・～合法°$_4$・～公務中°・～合理°$_2$・～合理的° ～国民°・～磁性△・～資本主義°・～宗教法人△・～主流°$_6$・～主流派°$_3$ ～常識$_3$・上場会社△・～常任°$_5$・～上部構造△・～上部構造的△・～人道的$_2$ ～水銀系°$_2$・～水銀農薬°・～推薦°・～スターリン化△・～誠実△・～生産的° ～政治的△・～製造業°・～政党的°・～戦闘員°$_2$・～存在°・～対称°・～妥協的$_3$ ～転向°・～同盟°$_{28}$・～人間性°・～人間的°$_2$・～粘着性°・～能率$_3$ ～爆撃地帯°・～ピリン系°$_6$・～武装°$_1$・～文化国△・～文学的△・～ベトコン°$_2$ ～暴力°$_2$・～暴力手段°・～保有国°$_3$・～民主的°・～友好政策°・～友好的°$_2$ ～立憲的°

※$_1$　°＝新聞にのみあらわれたもの　△＝雑誌にのみあらわれたもの　無印＝双方にあらわれたもの

※$_2$　語の右下の小数字は，出現度数を示す。無記入のものは，出現度数１を示す。

※$_3$　左欄のB/Aのように示した数字の，Bはその接頭語を含む語の異なり数を，Aは総出現度数を示す。

伴って，四字漢語を作る例は，よく見られる。たとえば，次のような例である。

(イ)　非民主的：無意識的　　(ロ)　非人間性：不合理性

(イ)の場合では，「意識的デナイヨウス」・「民主的デナイヨウス」のように言いかえれば，どちらも同じ構造を持っているように考えられる。しかし，「無意識的」が「意識ノナイヨウス」とも言いかえられるのに対し，「民主デナイヨウス」という言い方は成立しない。「無意識的」という語は，結果的には，「意識的デナイヨウス」と同じ意味を持つかもしれないが，構造上からは，「意識ノナイヨウス」あるいは「無意識ナヨウス」と解するのが適当と思われる。同様に，(ロ)の場合も，下線で示したような構造とみるべきで，「非人間性」は「人間性ニカケル（反スル）性質」と考えられる。

このように考えると，非は一次結合の語とは結合しにくいようであるが，必ずしもそうとは限らない。次の(ハ)と(ニ)を比較してみると，その構造には，式で示したようなちがいがみられ，(ハ)の例は，後続する二字漢語と直接に結合しているとみることもできそうである。

(ハ)　（○＋○○）＋○○：非合法政権・非同盟主義・非武装地帯

(ニ)　○＋（○○＋○○）：非宗教法人・非共産主義・非汚染地区

しかし，この(ハ)と(ニ)の差は，明確なものではない。どちらのように解釈するかは，個人によって，かなりゆれがあるものと思われる。(ハ)のような分解のしかたが可能なのは，「非合法」・「非同盟」などという言い方が慣用的に単独でも用いられることが条件であり，本来は，(ニ)のような構造を持っていたものが(ハ)のように意識されるにすぎないのかもしれないからである。

以上のような考え方で，無・不・未にくらべて，非が一次結合の語につきにくい傾向は説明されるが，一方，「非常識」・「非人情」のように，つねに二字漢語と結合する例もあって，なぜそうなるのかということは，かんたんには説明できない。それは，結局，接頭語としての非の機能にかかわる問題であり，それについては，以下の章で考えることにする。

4. 否定の接頭語と結合する語の意味

表1にみられるように，否定の接頭語と結合する語は，大部分が漢語であり，品詞論的に言えば，名詞に属する。しかし，この中には，「スル」を伴ってサ変動詞の語幹となるものや，いわゆる形容動詞の語幹に相当するものもある。

形容動詞の語幹と名詞との差違は，しばしば論議の対象となるところである。ここでは，形容動詞論を展開することが目的ではないが，否定の接頭語が形容動詞の語幹を作るかということを問題にする以上，それを無視するわけにはいかない。ただし，本論では，否定の接頭語がついた結合形全体や結合の対象となる語が，形容動詞か否かという正面からの論議はさけて，もっぱら語の文中における意味的な性格を中心に扱うことにする。（以下では，否定の接頭語と一次以上の結合語とが結合した単位を結合形とよび，結合形がさらに他の語と結合した語形を複合語とよぶ。）

水谷静夫は，形容動詞否定の立場から，いわゆる形容動詞の語幹が，語の断れ続きという観点から，名詞や副詞に近いことを論証し，形容動詞の語幹に格助詞がつきにくいことや語幹だけで主語となりにくいことの理由として，次のように述べている[*4]。すなわち，言語主体の認識作用において，対象は概念として把握され，言語表現において，実体と思考したものの概念が主語として表わされ，属性と思考したことの概念を述語として表わすとする。そして，属性的概念をさす語は，それが思考の対象となって実体視できる習慣がなりたっていない限り，格助詞がつきにくく，また，主語になりにくく，形容動詞の語幹とされてきたものはその典型であって，いわゆる名詞と語の本性が異なるのではなく，実体視しがたい概念をさす語という「思想上の制約」があるにすぎないとする。

また，塚原鉄雄は，国語の名詞は，事物（モノ）・事態（コト）・様態（サマ）という三種の意味を表わす機能を具有し，そのいずれを具現するかは，文脈―場面が決定するといい，事物と事態を表わす表現を名詞とし，様態表現を形容動詞の語幹とすれば，論理的には一貫するとする[*5]。

水谷のいう「実体概念」をさす語と，塚原の「事物・事態」を表わす表現とが完全に一致するかどうか*6はともかくとして，名詞あるいは形容動詞の語幹がさすところの概念が，どのような意味（内容）を表わしているかということは，これからの分析に有効だと考えられる。なぜならば，これから問題にするような語または結合形の多くは，抽象的な概念を表わし，文中の形態によって，名詞か形容動詞語幹かを弁別することは，まず不可能だからである。

そこで，以下では，文脈の中で，コトやモノを表わすとみられる語または結合形を「実体概念を表わす表現」とし，サマを表わすものを「属性概念」を表わす表現のようによぶ。たとえば，「たいせつなのは健康だ」の「健康」は，「健康トイウコト」という実体視された概念を表わしているのであり，「かれは健康だ」の「健康」が「健康ナヨウス」という属性を表わしているのとは区別される。この場合，「健康」という語が様態をもともと表わす語ということは考慮しない。その語が文脈中でどのような概念をさすかを問題にする。

しかし，これから問題にする，否定の接頭語と結合する語は，結合形の部分としてあらわれたものであり，単独ではどのような用法を持つかは，実際には決定しがたい。そこで，便宜的ではあるが，辞典類を参考にしつつ，筆者の内省によって，問題とする語がふつうどのような意味を持つかを分類してみることにする*7。

分類の基準としては，次の(1)～(5)をたてた。それぞれの項に該当する語数およびその総異なり語数に対する割合を示したのが表2である。二つ以上の項目に該当する語は，それぞれ一例として数えてある。

(1)～ガ…ガを伴って主格に立ちうる：無国籍・不道徳・未現像・非国民

(2)～スル…スルを伴ってサ変動詞となりうる：無許可・不支持・未処理・非公認（不釣合い・不似合のようないわゆる居体言も含む。）

(3)～ナ…ナを伴って連体修飾格に立ちうる：不公平・非近代的

(4)ノ…以上の(1)～(3)に該当せず，ノを伴って，性質や状態を規定する用法を持つ：不特定・非癌性・非公務中

(5)その他…以上の(1)～(4)に該当せず，結合形の部分としてしか用いられない：無任所・不合理（非合理）

表2　否定の接頭辞と結合する語の性格

用法 / 接頭語	(1)～ガ	(2)～スル	(3)～ナ	(4)～ノ	(5)その他	総異なり語数
無	69 (97.2)	34 (47.9)	—	—	1 (1.4)	71 (100.0)
不	64 (70.3)	36 (39.6)	27 (29.7)	5 (5.5)	1 (1.1)	91 (100.0)
未	25 (100.0)	24 (96.0)	—	—	—	25 (100.0)
非	52 (66.7)	11 (14.1)	19 (24.4)	3 (3.8)	1 (1.3)	78 (100.0)

※1　数字は，その用法を持つ語の異なり数を示す。
※2　（　）内の数字は，総異なり語数に対する百分比を示す。
※3　以下の表3・表4の記入法も，これに準ずる。

この表から得られることの第一は，否定の接頭語と結合することによって，語全体の意味的性格（文法的機能）が変わるか否かということを論ずる前提として，結合対象となる語がもともとどのような意味を持っているかということである。言いかえれば，否定の接頭語が，単に語彙的な意味を添えるのか，あるいは，語の文法的な意味をも変える機能を持つかということを検証するための第一段階ということになる。

かりに，(1)の用法が実体概念を表わすものとすれば，未―無―不―非の順に，かなり高い割合で，実体概念をさす語につくということになる。ただし，この(1)の数字には，(2)以下の用法と重複する語も含まれているので，(1)の用法しか持たない語の数値を示すと以下のようになる。

無…36（50.7%）：～軌道・～四球・～秩序

不…22（24.2%）：～規則・～景気・～人気

未…1（1.3%）：～成年

非…41（52.6%）：～国民・～能率・～戦闘員

すなわち，否定の接頭語と結合する265語のうち100語（37.7%）が実体概念を表わす用法しか持たないということになり，残りが属性概念をも表わしうるということになる。(2)の用法を持つものは，ほとんどが(1)の用法をも持つ，しかし，(3)・(4)の用法を持つ語は，(1)・(2)とは，ほとんど重複しない。これらの

ことから，否定の接頭語とその結合対象となる語の間には，次のような関係がみられる。

(i) 結合対象となる語は，実体概念・属性概念のどちらをも表わしうるような語が多い。

(1)と(2)：無競争・不安定・未解決　(1)と(3)：不自由・不親切

(ii) もっぱら実体概念をさす語ともっぱら属性概念をさす語では，前者のほうが多く，前者と結合しやすいのは，無と非である。

無：～期限・～関心・～気力・～事故・～趣味・～表情

非：～国民・～主流・～暴力・～製造業・～文化国・～共産勢力

不：～衛生・～均衡・～都合・～人気・～熱心・～道徳

(iii) 属性概念をさす語のうち，動作を表わす語と結合する用法は，どの接頭語にもみられるが，未は，特にその傾向が著しい。

未：～解決・～完成・～経験・～公開・～成立・～発表

不：～安定・～合格・～参加・～賛成・～信任・～勉強

無：～意識・～関係・～試験・～制限・～抵抗・～理解

非：～課税・～公約・～同盟・～衛星化・～軍事化・～スターリン化

(iv) 属性概念をあらわす語のうち，性質や状態を表わす語と結合する用法を持つのは，不と非だけである。

不：～活発・～完全・～健全・～十分・～鮮明／～特定

非：～衛生的・～近代的・～文学的・～民主的／～癌性

*4 水谷静夫「形容動詞弁」（『国語と国文学』28巻5号）

*5 塚原鉄雄「形容動詞と体言および副詞」（『文法』2巻6号）

*6 塚原によれば，「東郷平八郎は，東洋のネルソンである」の「ネルソン」は様態の表現で，形容動詞の語幹ということになる。しかし，「ネルソンノヨウナヒト」というように考えれば，実体概念視されたものとして，「東洋」のという連体修飾語を伴う理由も説明できるのではないかと思う。

*7 「完全」という語は，ふつう，「完全な・完全に」というような形で，属性概念を表わすと考えられるが，「完全がかれのモットーだ」という言い方がないとは言い切れない。しかし，筆者の基準では，このような言い方はふつうはあらわれにくいと考えた。

5. 否定の接頭語を含む結合形の用法

次に問題とするのは，否定の接頭語を含む結合形が，文脈の中でどのような意味を表わすかということである。分析の基準となる考え方は，結合の対象となる語の場合と同じであるが，実際の文脈に出現した用法を分析するという点で，やや異なる。

結合形が文中に出現する場合に，大別して，三つの場合がある。第一は，単独で出現する場合で，形容動詞の語幹といわれるものも，語尾と切りはなしてここに含める。第二は，さらに他の語（単位）と結合して，複合語の部分要素となる場合である。そして，第三は，付属的要素を伴って，いわゆる派生語を構成する場合である。ただし，ここでは，第三の用法に属するものは数が少ないので，第二の用法に含めて，まず，単独の用法か結合の用法かに分類する。そして，単独の用法については，実体概念をさすのに用いられたか，属性概念を表わすのに使われたかを問題にすることにする。分析の結果を表3に示す。

表3　否定の接頭語を含む語の用法

用法＼接頭語	単独の用法			結合の用法				総異なり語数
	実体概念を表わす用法	属性概念を表わす用法	単独の用法を持つ語数	前部分の用法	後部分の用法	派生の用法	結合の用法を持つ語数	
無	16 (22.5)	44 (62.0)	53 (74.6)	31 (43.7)	4 (5.6)	2 (2.8)	34 (47.9)	71 (100.0)
不	32 (35.2)	58 (63.7)	68 (74.7)	28 (30.8)	21 (23.0)	3 (3.3)	46 (50.5)	91 (100.0)
未	2 (8.0)	17 (68.0)	18 (72.0)	14 (56.0)	—	—	14 (56.0)	25 (100.0)
非	43 (55.1)	20 (25.6)	59 (75.6)	28 (35.9)	—	1 (1.3)	30 (39.7)	78 (100.0)

単独の用法と結合の用法をくらべると，前者のほうが多く，どの接頭語を含む結合形も，総異なり語数に対してほぼ似た比率を示している。結合の用法では，あらわれる位置に多少の差がみられるが，複合語の部分要素になる機能を，どの結合形も具有しているとみられる。

結合の用法で，複合語の前部分としてあらわれる用法は，どの結合形にもみ

られる。前部分にくる場合は，ほとんどが下にあげる例のように，後部分にくる実体概念をさす語の性質・状態などを規定する，属性的な概念をさす用法にかぎられ，非の場合にのみ，「非戦闘員死傷・非管理職数」のように，実体概念をさす用法が少数みられるにすぎない。

無記名投票・無事故運転　　不起訴処分・不完全燃焼

未経験者・未合意事項　　非対称デザイン・非粘着性加工

後部分の用法は，無と不だけにみられる。無の例は，以下にあげる例のみであるが，不の場合には，前部分に実体概念をさす語がきて，主述や補足の関係を持つ例が多くみられるのが特徴的である。

保守系無所属・頑陋無慈悲・連続無四球・33イニング無得点

実現不可能・男女不平等・土地不案内・大会不参加・佐藤不支持

また，派生の用法とは，「若さ・清らかさ・高すぎる・静かすぎる」のように，一般に和語の形容詞や形容動詞の語幹につく用法を持った接尾語を伴って，語を形成するものをいう。出現した例は，「無関心さ・無責任すぎる・不自然さ・不自由さ・不的確さ・非誠実さ」などである。このような用法は，いわゆる形容動詞の語幹が，名詞よりも形容詞の語幹に近い性質を持つことの例証によくあげられるものであるが，属性概念的な用法とみることができよう。

以上，結合の用法として出現した，否定の接頭語を含む結合形には，全体として，属性概念を表わす傾向が色濃くみられる。

単独の用法で，実体概念をさす例とは，次のようなものをいう。

① 何でもかんでも二人の人間をくっつければ気分がいいというのだから無責任がネクタイをぶら下げているようなものだ。<キング>

② 皆川は開幕以来，六試合に登板して無失点を続けていたが<毎日>

③ 利益の配分にあたって不公平がおき，それが不満のタネになる。<農業朝日>

④ 投書者の場合のような不合理は早く解決してほしいものだ。<朝日>

⑤ 作品は既発表，未発表とも他に使用権がないものに限ります。<朝日>

⑥ 行政区画名を長々しく書いた上にさらに局名を付するような非能率が使われないのは当然だと思う。<朝日>

これらの例に共通していることは，一般の用法では，属性概念をさす場合に用いられることが多いということである。すなわち，「～ナヨウス」という意

味を持つ語を，「～ナコト・～ナモノ」というように実体視した例といえよう。現代人の言語意識からみて，多少不自然な感じを持つ例があるとすれば，それは，そういう習慣が成立していない語だからである。このような，属性概念をさす語を，実体視した概念として表わす用法は，無・不を含む結合形に多い。

上にあげた例は，たまたま主格に相当する場合が多いが，必ずしもそうとはかぎらない。⑦・⑧のような例は，実体概念をさすか属性概念をさすか微妙であるが，⑦は「無免許トイウコト」という意味で，検挙された理由となる事態をさし，⑧はどのような状態でつかえるかという意味で，属性を規定する用法とみられる点に相違がある。

⑦　中学時代にバイクの無免許で検挙されたことはあるが＜読売＞

⑧　送信距離は，戸外で100m，室内で40mありだれにでも無免許でつかえます。＜読売＞

同じ実体概念をさす用法でも，次のような場合は，属性概念をさす用法には，ほとんど用いられない。このような例は，非に圧倒的に多い。表3の単独の用法で，非を含む結合形だけが，他と異なる数字を示している理由の一つは，ここにある。

⑨　未成年が罪を犯した場合，（中略）まず家裁送りとなって＜毎日＞

⑩　その内容は，西洋医学的な分析が全然ないが，それも分析以前の非科学ではなく，むしろ前科学という方が適している。＜大法輪＞

⑪　存在と非存在，現実と虚構のとけあった世界を＜毎日＞

属性概念を表わす用法を，文中でどのような形態をとるかによって分類したのが表4である。

｛～だ・～。｝は，述語にあたる部分で，不に多くみられる。

⑫　共産側の強固でよく調整された政策に比べると，米国の政策は後手で不明確である。＜農業朝日＞

⑬　わき縫いのスソ始末は，約半数が不十分。＜読売＞

⑭　全国一律最賃制について何ら具体的な考え方を示さないのは無責任だとして＜朝日＞

無は，｛～で・～に｝の形をとることが多く，不は，｛～で｝の形をあまりとらない。とる場合も，連用中止の用法で，述語相当のはたらきを持つ。↗

表4　否定の接頭辞を含む語が属性概念を表わす場合の形態

形態 / 接頭辞	～だ	～。	～で	～に	～と	～な	～の	総異なり語数
無	10 (14.1)	7 (9.9)	20 (28.2)	16 (22.5)	2 (2.8)	14 (19.7)	17 (23.9)	71 (100.0)
不	23 (25.3)	9 (9.9)	7 (7.7)	14 (15.4)	4 (4.4)	40 (44.0)	3 (3.3)	91 (100.0)
未	4 (16.0)	1 (4.0)	3 (12.0)	1 (4.0)	—	—	15 (60.0)	25 (100.0)
非	3 (3.8)	2 (2.6)	2 (2.6)	4 (5.1)	1 (1.3)	16 (20.5)	5 (6.4)	78 (100.0)

※　形態の項目のうち，下記のものは，（　）内にあげたような形態も含む。
　　◦～だ（～だ・～だった・～である・～であった・～でない・～です・～でした・～なので・～なのに・～なら・～だろう・～でしょう・～か
　　◦～で（～で・～であり・～であって・～でして・～にて）

⑮　多くの人はもう忘れているかもしれないが，無修正で決定された「秋季年末闘争方針」というのがあった。＜エコノミスト＞

⑯　条約は無期限に効力を存続する。＜朝日＞

⑰　予算の裏づけが不十分で，施設や消防活動が万全とはいえない。＜朝日＞

⑱　ことしの軍縮会議を不必要に暗く宣伝していると非難するとともに＜読売＞

連体修飾の場合，**不・非**は｛～な｝の形をとりやすい。ただし，**非**の結合対象となる語は，ほとんどが「非○○的」のように，「的」を伴う。例外は，「非公式な」と「非常識な」の2例だけである。

⑲　不得意な学科をこれで家庭学習しよう。＜毎日＞

⑳　住民はあいかわらず非衛生的な生活環境下におかれたままとなっている。＜朝日＞

一方，｛～の｝の形をとるのは，**未**に特徴的で，**無**は｛～の｝・｛～な｝のどちらをもとりうる。**不・非**は，｛～の｝を伴うことが少ない。

㉑　第三次協定の際，未解決の問題としてもち越された問題に＜エコノミスト＞

㉒　…と一言いっただけで，あとは無表情のまま（中略）エレベーターに消えた。＜朝日＞

㉓　不都合の方は履歴書を郵送して下さい。＜朝日＞

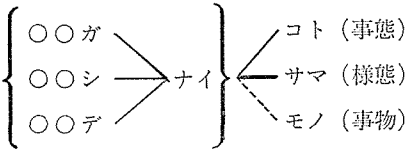
㉔ 非磁性の金属<科学読売>

6. 否定の接頭語の機能

以上，否定の接頭語がどのような意味的性格を持った語と結合するか，また，結合することによって，結合形全体がどのような意味をさすかということについて検討してきた。ここで，まとめの意味で，はじめに提出した問題にたちもどって，全体を整理することにしたい。

まず，第一のテーマ，すなわち，否定の接頭語が形容動詞の語幹を形成するかという点についていえば，なかば肯定，なかば否定ということになる。その理由は，たしかに否定の接頭語がつくことによって，もともと名詞としての用法しかなかったものが形容動詞語幹と同じ性格を持つようになる例は多いが，結合の対象となる語には，もともと形容動詞の語幹であるものも含まれており，また，結合形が形容動詞の語幹となりえないものも存在するからである。

この問題を解決するためには，いわゆる形容動詞という，品詞分類の比較的下位のレベルで論ずるのは無意味だと考えるのが筆者の立場であり，名詞と形容動詞語幹の区別をせずに，語の意味的性格の分析を中心に論を進めてきたのは，そのためであった。そうした観点からいえば，これらの否定の接頭語の機能は，次のように要約することができる。



否定の接頭語は，属性概念をさす語と結合しやすいが，実体視されうる概念を表わす語とも結合することができる。また，結合の対象となる語は，多くの場合，抽象的な概念を表わす。そして，結合形としては，属性概念をさす傾向が濃厚であり，実体概念をさす場合に用いられることは少ない。このような機能は，どの接頭語にもみられるが，それぞれの機能を比較してみると，必ずしも同じではない。特に，非と他の接頭語との間には，かなり明確な相違点がある。あるいは，上に要約したような機能からはみ出るものがあるといってもよ

いかもしれない。そこで，第二のテーマ，これらの否定の接頭語には，どのような用法・機能のちがいがあるかという問題にはいらなければならない。

無と不は，結合形全体が属性概念を表わすのに用いられる度合いがほぼ等しく，多くの語と結合する点で，似た機能を持っている。この両者の大きな違いは，結合の対象となる語の性格にある。不がどのような性格の語にも結合できるのに対し，無は，もっぱら実体概念のみをさす語，および属性概念を表わす語でも，サ変動詞の語幹になりうる語にしかつかない。サ変動詞の語幹につくという点では，不も同じ機能を持つが，無の場合には，「～スルコトガナイ」のように実体視する意が強く，不の場合には，「～シナイ」のように，動作性を伴った意味に意識される傾向が強い。

ただし，注意しなければならないのは，不にも，実体概念をさす語と結合する用法があることである。たとえば，「不人気・不道徳・不衛生」などがそれである。今回のデータには含まれていないが，「不人情・不美人」なども，同様の例である。これらの実体概念をさす語には，ある種の共通な性格がみられる。一つは，単独で，属性概念を表わすことは少ないが[*8]，「人気役者・人情刑事」のように複合語の前部分に用いられる場合には，属性概念をさすことがある点である。もう一つは，これらの語によって指し示されることがら，あるいは，そのことがらを具備していることが，一般にプラスの価値観を伴うことである。このような性格は，否定の接頭語と結合する語にある程度共通しているものでもあるが，特に，不と結合する実体概念をさす語に著しい。正確に言えば，これらの語は，文脈中では，実体視された概念をさすのに用いられることが多いが，潜在的には，属性概念をさす語だと考えられる[*9]。

また，不を含む結合形が，複合語の後部分となったり，述語となったりすることが多いのに対して，無は，属性概念を表わす場合でも，「～で・～に・～の」という形態をとりやすい点など，全体として，不と結合する語，および，不を含む結合形のほうが，無の場合よりも属性概念的であるといえる。

未は，無・不にくらべると，結合する語の性格が限られており，用法もあまり多くない。未と結合するのは，すべて動作性の語であり，結合形は，ある時点までにその動作が完了していない意味を表わす。したがって，結合の対象と

なる語を語幹とするサ変動詞には，瞬間動詞が多い。動作性の語と結合し，実体概念を表わす用法を持たない点では，不に近く，結合形が，｛～の｝という形態をとることが多い点では，無と共通しており，両者の中間的な性格をそなえているといえよう。

非は，各種の性格の語と結合しうること，結合形が属性概念を表わす場合の形態などの点で，不と類似しているし，実体概念を表わす語と結合しやすい点で，無と共通な面もある。また，非を含む結合形が，実体概念を表わす比率が属性概念を表わす比率よりも高い点では，他の接頭語のどれとも似ていない。しかし，このような特徴は，さきに無と不を比較したような方法では，とらえがたい。なぜならば，非には，他の接頭辞の持っている機能の一部が欠けているからである。

無・不・未には，それぞれ多少の差はあるが，「…ナイコト」・「…ナイヨウス」のように，結合対象となる語がどのような性格の語であっても，否定の意味を添えると同時に，事態や様態を表わす，属性的概念をさす名詞を作る点に共通性を持っている。しかし，結論的にいえば，非の機能は，単に否定の意味を添えるだけで，属性概念を付加するはたらきはない。

「非宗教法人」という語は，「宗教法人デナイ法人」という意味を表わし，「宗教法人デナイコト」や「宗教法人デナイヨウス」という意味を第一義的に表わすことはできない。また，「非戦闘員」という語は，「戦闘員デナイコト」を表わすのでなく，「戦闘員デナイ人員」という意味を表わす。もちろん，文脈によって，これらの語が，「…デナイコト」という意味を持つことがないとはいえないが，それは，「宗教法人」や「戦闘員」という語に，事態を表わすはたらきがあるからであって，非と結合したことによって，語の性格がかわったためではない。「非国民」のように，実体概念をさす二字漢語につく例は，あとで述べるように例外的ではあるが，やはり，「国民トシテフサワシクナイ国民」という意味であり，「国民」であることにかわりはない。

非を含んで属性概念を表わすようにみえる語の多くは，もともと，「非人間性・非粘着性」・「非人道的・非民主的」のように，「性」や「的」など属性概念を付加する接尾語を含んでいるのであって，非は，ただ否定の意味を添え

るはたらきしかない。たまたま，データの中には，「不衛生」と「非衛生的」という例があるが，この二つの語に，かりに語彙的にも文法的にも意味の差がないとすれば，**非**は**不**の持つ語彙的な意味を，そして，「的」は文法的な意味をそれぞれ分担しているとみることができる。

しかしながら，「不衛生」の意味で，「非衛生」という言い方が存在しないかというと，そうとも言い切れない。データにあらわれたものだけでも，「非公式・非合法・非公開・非合理・非常識・非能率」のように，属性概念を表わす用法を持ち，**無**や**不**の場合と同じような構造を持つ言い方もかなりあるからである。なぜこのような言い方が存在するのかを説明するためには，**非**と結合する語の構造から考えなければならない。

非と結合する語には，二次結合以上の語が多いことは，前に述べた。それを図式化してみると，次の二種になる。

(1)　非＋（A＋B）

(2)　非＋（A＋b）

bは，「的」・「性」・「化」などの接辞性を持った語を表わす。Bには，実体概念を表わす語が，Aには属性概念を表わす語や実体概念を表わす語でもBをなんらかの意味で限定する語がきやすい。**非**が結合対象となる語の性格をかえないということは，**非**によって，否定の意味を付加されるのは，（A＋B）あるいは（A＋b）であるけれども，実は，Aの部分だけを否定しているということを意味する。「非汚染地区」という語が，「汚染地区デナイ地区」という意味でありながら，「汚染シナイ地区」のように解されるのは，そのためである。

「非＋（A＋B）」という結合形がたまにしかあらわれない場合は，そうした錯覚は起こりにくい。しかし，出現頻度が高かったり，「非＋（$A+B_1$）・非＋（$A+B_2$）……」のような形がしばしばあらわれる場合には，次の式で示す

非＋（A＋B）→（非＋A）＋B

ような現象が起きやすくなり，（非＋A）という結合形が単独で種々の用法を持つようになるわけである。

「非常識」という語は，**非**が二字漢語と結合した語として，国語辞典に早く

から登録されているが，戦前の辞書には，「常識的ナラザルコト」というような説明が加えられているもの*10がある。このことは，「非常識」という語形が生まれるより先に，「常識的」という語形が存在していたことを示す手がかりとなるものとみられる。「非能率」や「非合理」なども同様に考えられるし，「非常識」と同じく，早くから辞書に出現していた「非公式」は，「公式○○」という語形の豊富さを考慮する必要があろう。

非が二字漢語と結合しにくい理由は，以上に述べた点にある。属性概念を表わす二字漢語と結合する例がほとんどないことは*11，非がもともと実体概念を表わす語につきやすいことを示すと思われる。また，実体概念を表わす二字漢語でも，部分要素の意味関係が，先の（A＋B）のように，属性概念＋実体概念という意味的な関係にあれば，非と結合しやすいように考えられるのに，ほとんど存在しないのは，接頭語としての非の成立が無・不にくらべて新しく，二字漢語を部分要素に分解する意識が薄らいできてからのことであるためと考えられる。

少数ではあるが，実体概念を表わす二字漢語と結合する用法は存在する。たとえば，先に⑩・⑪にあげた「非科学」・「非存在」などの例である*12。この用法は，比較的新しいものとみられ，二字漢語のさす概念とまったく別個あるいは異質の概念をさす場合に用いられる。漱石の「非人情」もこれにあたるかもしれない。

このような接頭語としての非の特徴は，無・不・未とのちがいだけでなく，二字漢語の部分要素として用いられる非とも異なると思われる。たとえば，「きょうは非番だ」・「非礼なふるまい」・「非鉄金属」などの用法は，むしろ，無や不と共通の性格を持っている。

以上，現代語における接頭語としての無・不・未・非の用法について考察してきた。さらに論をすすめるためには，二字漢語の要素としての用法や，ひいては，その成立の問題について論じなければならない。それらについても，多少の用意はしているが，今は，その指摘のみにとどめる。

*8 「彼女は，クラスで一番美人だ」のように使われる場合は，形容動詞の語幹と同様に属性概念を表わす用法といえよう。

*9　このような不の用法は，「不器量・不作法・不細工」などの「ブ」と読まれる単位を表記する場合に，いっそう顕著である。

*10　たとえば次のようなものがある。

○富山房『大日本国語辞典』（大正４年～８年）

○平凡社『大辞典』（昭和11年）

*11　データに出現した例のうち，「非誠実」という結合形だけが例外的である。一般人の語感として「不誠実」というほうがふつうだと意識されるならば，それは，「非＋（誠実＋○○）」という語形から生まれたものでないからであろう。

*12　「非国民」の例もここにあげるべきだが，その成立に「国民的」という語形の存在が考えられないでもないので，除いた。「非科学」は文脈からおして，「科学的」という語形を問題にする必要はない。

〔付記〕

小論でとりあげた否定の接頭語を部分要素として含むことの多い三字漢語一般の性格については，下記の論文で考察を加えたので，参照されたい。

「三字漢語の構造」（国立国語研究所報告『電子計算機による国語研究VI』に所収予定）